

ダニエラ・コリー著「マキアヴェッリ政治思想における 現実とユートピア」——翻訳と解説

石黒 盛久

Daniela Coli(trad. in giapponese da Morihisa Ishiguro), “Realtà ed utopia nel pensiero di Machiavelli”

Morihisa ISHIGURO

以下に訳出するのはイタリアの哲学者、政治思想家ダニエラ・コリー氏の論文「マキアヴェッリ政治思想における現実とユートピア」（原題“Realtà ed utopia nel pensiero di Machiavelli”）である。この論文は、マキアヴェッリと同時代に活躍したフィレンツェの宗教改革者サヴォナローラの処刑500年を記念する目的で、1997年5月に催された研究集会をもとに刊行された論文集『サヴォナローラ——民主主義・僭主政・予言』（G.C. Garfani ed., *Savonarola-deomrazia tirannide profetia*, Firenze 1998）の一編として収録された。ダニエラ・コリー氏はイタリア・ルネサンス思想研究の泰斗エウジェニオ・ガレン教授の門下生で、現在フィレンツェ大学文哲学部哲学科の常勤講師の職にあり、クローチエ、ジェンティーレによる二〇世紀初頭のイタリア哲学と、近世初頭から啓蒙主義期にかけての政治哲学、道徳哲学に主な関心を寄せている。刊行著作として『クローチエ、ラテルツァ書店、ヨーロッパ

文化』（Croce, *Laterza, la cultura europea*, Bologna 1983）、『トーマス・ホブズの近代性』（*La modernità di Thomas Hobbes*, Bologna 1994）、『ジョバンニ・ジェンティーレ』（*Giovanni Gentile*, Bologna 2005）などがある。また近年では文化総合誌『ラ・パロマー』（*La Palomar*）の編集者として、活躍の場をアカデミズムの外にも広げはじめている。訳者はイタリア留学中コリー氏と知り合い、研究分野がマキアヴェッリの政治思想であった関係上、コリー氏の関心分野と重なる部分も多かったことから、様々な研究上の便宜を提供していただき、またルネサンス思想研究に関する助言を受けたりすることで親交を深めることができた。この交流はまた、イタリア・ルネサンス哲学研究の確立の背景にある、クローチエやジェンティーレによる近代イタリアの文化的アイデンティティの探求など、従来見落としていた視点の示唆をうけることにより、訳者の現在のルネサンス観が形成されたことから、大

変刺激的なものとして今日もなお続いている。

さて本論とりあげられたマキアヴェッリの問題は、一方にクローチエやジェンティールによるイタリア哲学の成熟とイタリア国民文化の問題、他方にホッブスやルソーなど近世啓蒙思想家の政治思想における近代性の問題という、氏の二つの関心からすると一見周縁的な主題に映るかも知れない。しかし地方分権主義（カンパニズモ）の強いイタリアにおいて国民国家、国民文化を人為を通じて一つの伝統として根付かせるという、近代イタリアにおける普遍と土着をめぐる課題は、たとえば有名なグラムシのマキアヴェッリ論を引くまでもなく、前世紀前半のイタリア社会哲学の一つの参照点として、マキアヴェッリの姿を大きく浮かび上がらせるものであった。それゆえマキアヴェッリの問題はクローチエやジェンティールに関心を寄せる、コーリ氏にとつてもむしろ本質的なものであると言えるだろう。また氏が展開するホッブス論やルソー論も、特に本論にも言及される自然権の譲渡や社会契約といった国家主権の正統性の問題を基準とする、それらの思想の近代性の測定の参照点として、マキアヴェッリの権力論を常に暗黙の前提においており、その意味からもマキアヴェッリ解釈こそが、氏の思想の鍵となると称しても過言ではないだろう。このように本論はコンパクトな体裁をとりながら、氏の思想に近づくための格好の手がかりになる。また言及し忘れてはならないことは、マキアヴェッリ思想の論理的帰結を象徵する存在としてのアウグストゥスの姿の重要性（アウグストゥス政権／メディチ政権／ソデリーニ政権の政治力学的等位性）、政治社会的葛藤に対するマキアヴェッリとホッブスの評価の相違、マキアヴェッリの思想における個人の家門・団体・階級への埋没（それは中世フィレンツェのいわゆる組合主義の著作内における反響ではないか）など、彼の思想の個別的な研究という面から見ても、従来強調されてこな

かったにもかかわらず、その謎を解く（アリアドネの糸）ともなるべき様々の卓見が示されていることである。訳者自身そのマキアヴェッリ解釈の錬成にあたって、こうした氏の指摘に啓発されることが少なくなかった。近代イタリア哲学、ルネサンス思想史、政治学など広く江湖の好学の士に本論の一読をおすすめる所以である。

マキアヴェッリ政治思想における現実とユートピア

—ダニエラ・コーリ—

もし読者が「現実とユートピア」という語句に、かぎ括弧をつけてみるならば、この発表の題名の意図は、いつそう明晰なものとなるであろう。ハバースマスによれば言葉は、その指し示す概念が必ずしも明晰でない場合、かぎ括弧のなかにおかれるものである。この発表のばあい「現実」と「ユートピア」という二つの句は、さまざまな理由からかぎ括弧のなかに据えられることとなる。主君ピエロ・ソデリーニの失脚と、自身の官職の剥奪の後に執筆された、『デイスコルスイ』におけるマキアヴェッリにとり、「ユートピア」は継続し、彼に大きな影響力を与えた状況であった。この「ユートピア」という理念のため彼は、ローマをモデルとして選択した。ここであるローマとはすなわち、リヴィウスの歴史叙述的修辭を通じて、かつまた彼の政治的修辭を通じて抽出された「現実」に他ならない。ローマこそは長期にわたり存続した国家であり、また―かれがそれとの比較のためもちだした、スパルタやヴェネツィアの事例とは異なつて―強盛を誇った国家である。周知のようにローマの存在は、あらゆる時代の、あらゆる政治思想の関心を喚起するものであった。トーマス・ホッブスは百年の

後、『タキトゥスの端緒についての論考』なる著作を、明らかにマキアヴェッリの『デイスコルスイ』の影響下に、執筆することとなる^①。彼によれば、あらゆる国家は生成のサイクルを有するその故に、共和政体をも、君主政体をもとることが可能である。だがしかし彼は、共和主義者という原則を崩してはいない。それというのも、君主という存在を許容するにもかかわらず彼が推奨するのが、王朝的世襲を通じてではなく、選挙を通じて推戴される、個人的かつ議会主義的な王権であるからに他ならない。彼は世に、三つの政体が存在することを認めている。すなわち君主政、貴族政、民主政の三つである。これらのすべてが劣化して、専制に転換してしまう―腐敗することが考えられる。君主政は唯一者の専制へと、貴族政は寡頭政^②少数者の専制へと、民主政は無政府状態^③多数者の専制へと行きつく^④。そこで貴族と平民がともども代表される混合政体こそ、マキアヴェッリにとりより望ましい政体だということとなる。この視点からローマ共和国が、なかならず諸王の放逐からグラックス兄弟の治世に至るローマ共和国が、彼のモデルとして浮上してくる。そこにおいて貴族と平民という二つの階級が、双方統制される社会／政治システムこそ、マキアヴェッリの関心を引き寄せるものである。この点において、その政治生活が元老院と平民階級により支配されたローマ共和国は、彼のパラダイムを満足させるものだったと言える。マキアヴェッリの議論は決して、分析的であつたり体系的であつたりするものではない。だが彼の議論を通じて、今日なお解かれることのないさまざまな問題が、噴出してくるのだ。

ローマの歴史はいうまでもなく、フィレンツェの歴史を分析・考察するための重要な参照点である。ローマとフィレンツェは互いに重なり合い、時として彼はローマの歴史の上に、フィレンツェ史の出来事や諸問題を、さらには自身の政治的経験において直接

見聞した出来事や諸問題を、投影する。つまるところ彼にとりローマとはそこから、持続的でかつ強大化し、更に出来ることなら、それ自体のように破局的様態で崩壊しない、新国家創設の教訓を引き出すことができる、そのような「現実」に他ならない。こうしたことを前提としたとき、次のことに着目することが大切となる。即ち、『デイスコルスイ』においてマキアヴェッリが考察したローマとは、ティトゥス・リヴィウスのローマだということである。彼こそは―その『ローマの革命』でロナルド・シームが説く如く―かのアウグストゥス帝御用の歴史家であり、ヴェルギリウスやホラティウスと並んで、帝により創出された新体制を正統化する側近著作家の一人であつた^⑤。皇帝アウグストゥスと化したオクタヴィアヌスにとり、カエサルを語ることは最小限に押さえられることが望ましかった。なぜなら帝の統治はカエサルの統治に酷似していたからである。もしカエサルにつき口を閉ざすことが不可能であるならば、カエサルはアウグストゥスおよびユリウス王家の先駆者として精神化され聖化されるか、さもなければもう一人の悪人アントニウスのように、一人の悪人として語られるかどちらかであつた。タキトゥスによれば、カエサルの誕生がローマにとり一つの摂理であつたか、それとも呪詛であつたかという問題をリヴィウスが提起したとき、アウグストゥスはカエサルを、さながらポンペイウス党の者であつたかのように批判したと、セネカは語った。アウグストゥスとその歴史家は、互いを熟知していたのだ。たとえばキケロはあらゆる意味において、重宝されたと言えよう。アントニウス批判のために彼は、自由の擁護者―真の愛国者に仕立て上げられた。それが理想的国家即ち、ポリビオスにより賞賛されたスキピオ時代のローマを叙述しているにもかかわらず、彼の『共和国論』はカエサル・アウグストゥスの「新共和国」の正統化のため活用された。こうしてキケロは、その死

後の栄誉を獲得したのである。「キケロは偉大な雄弁家であり、また偉大な愛国者であった」とアウグストゥスが語ったとは、プルタークの言である⁽¹⁾。周知のようにキケロは、必ずしも聖人君子とは称しがたかった。彼は裁判にかけることなく政敵を殺害しているし、その私生活をあげつらうことにより、アントニウスの名声を損なおうとした。自分の与党や取り巻きをもたなかったキケロの政治計画は、共和国の現状に大きな変更をもたらすものではあり得なかった。著作『法律について』で彼は、ローマの政体の基本に修正を加えるよう求めている。なかならず彼が求めたのは、元老院と監察官の権限の一段の強化である。彼は富裕階層間の調和を、さまざまな社会階層間の機能と条件に関する、伝統的定義を擁護した。これはまさに、シームの言うローマ革命を成就したアウグストゥスが抱懐した、政治思想に他ならない。アウグストゥスなくして君主政が確立されなかったことは言うまでもない。だが専制君主と、つまりはローマの自由の破壊者と見なされるのは、カエサルの方である。カエサルが半ば東洋風の個人崇拜の儀礼に、何の関心も示さなかったにもかかわらずそうなのだ。こうした儀礼の樹立者こそ、君主政の創設者であるアウグストゥスその人である。アウグストゥスと彼の御用の歴史家の企図は、このようにして完全なる成功を収めた。同じようにマキアヴェッリにとつても、彼がコジモ・デ・メディチと比較を試みたカエサルは、あくまでも僭主であった。だとしたら、メディチ家の権力の確立者であるロレンツォ・デ・メディチが彼により、アウグストゥスがそうであったのと同様に、悪意をもって遇されなかったと言うことは、極めて興味深いことではなからうか。

僭主の問題につきマキアヴェッリは、ローマにおける独裁官制度が、決してネガティヴな性格のものではなかったことを主張している。独裁官は戦時に際して元老院によって指名され、その任

期は六ヶ月であった。マキアヴェッリにとりむしろこの制度は、戦時下のローマのためポジティヴな性格を有していた。マキアヴェッリにおける僭主のはらむ問題点は、それが一個人による統治であるという点にはなく、その任期の永続性に存する。もしこうした人物による支配が長期にわたった場合、かかる支配は必ず僭主政への端緒となるということが、マキアヴェッリの結論に他ならない。そこで「体制」(ordini)ということが、多様な統治機関の存在ということが重要となってくる。こうした諸機関は様々な政治勢力を代表するものであるが、相互に拘束しあっており、またこうした相互拘束を介して互いに対立し合っている。このように形作られた政治システムは必然的に、葛藤を招来するが、マキアヴェッリに言わせれば社会的・政治的葛藤性は、国家の健全性自体にとつての、物理的必要条件であった。葛藤や争乱はある国家の成長に有益なものである。争乱に満ちたローマの歴史―国家の内外における抗争の歴史―は、葛藤が如何にしてポジティヴなものであり得るかを示す、格好の実例でなのだ。

事実マキアヴェッリは次のように記している。「もし新共和国を建設しようとするのであれば何人といえども、古のローマの如くその領域や支配権を拡大しようと望むのか、それともその境域にとどまろうと欲するのか、そのどちらであるのかをよく吟味しなければならない。前者の場合には国家をローマに倣って編成し、社会全体の争乱や不和を、可能な限り許容しなければならない。なぜなら多数の武装した人民を欠い共和国は、成長をみることは決して出来ないし、またその国が十分成長してしまつた場合、それを維持していくことが出来ないからである」⁽²⁾。他方、もし自己拡大する能力をもたない国家が望まれる場合には、ヴェネツィアの実例に倣うことが推奨される。このヴェネツィアこそは「イタリアの大半を、大抵の場合金銭や奸計によって併呑しながら、

自身の實力を試される段となると、一切を一日で喪失してしまつた」、そのような国家なのである⁽⁶⁾。『デイスコルス』第1巻第28章に彼が説くところによれば、フィレンツェは軍事力を有さずまた、その内部の葛藤の解決のため、誰彼かまわずその身を投げ出すような国家であるそのために、脆弱で優柔不断たらざるを得ない⁽⁷⁾。ローマにおける如く、継続的葛藤状態と軍事力こそがある国家を、堅固にも強大にもするのである。国家の成功の決め手とは、栄光や富、権力を目指す、人民間の一時に無慈悲なまでの一不断の競争なのだ。事実人間というものはマキアヴェッリによれば、自身の所有するものに決して満足せず、自身が所有しないものを常に欲望する存在なのだ。「自然は人間を、あらゆる物事を欲することが出来るよう作り出しながら、同時に何事をも獲得し得ないようにした。そのため獲得しようとする欲望が、獲得する能力以上のものとなってしまうことが常態となり、そこから所有するものに対する不満足が生じることとなつた」⁽⁸⁾。このような断言は別としても一般的に言つて、権力をめぐる人間たちの欲望と、それを目当てとする闘争をマキアヴェッリは、自由に対する愛の名の下に崇高化している。もちろん、自由に対する過剰な愛が国家を破滅に導くと、彼が皮肉っぽく付け加えていることに、目を背けてはならないとしてもだ。

マキアヴェッリの説によれば、政治体系の活力に重要なことは即ち、自治ということである。自治とは換言すれば国内的葛藤を、外国勢力に頼らず解決する能力のことに他ならない⁽⁹⁾。ここで彼は同時代の、フィレンツェならびにイタリアの現実を念頭に踏まえている。マキアヴェッリが具体例として持ち出すのは、アラルンテの一件だ。この人物こそ自身の姉妹の復讐のため、外国勢力を呼び出した人物なのだ。もし彼が、都市の法律によって侵害に対する復讐を遂げることが出来たならば、彼とて外国勢力に頼

る必要などなかったことだろう。このような事態を回避するために、一国の内政的葛藤を解決する法律が、必要となってくる。だが新たな問題を摘出することによりマキアヴェッリは、さらにその先へと前進する。その新たな問題とは、そのような人物がそれ以外の諸機関を蔑視し、法を制定する権威をもつまにその故に、立法者は僭主へと変貌し得るという事実である。彼らが公平で自由な同意に基づき選任されたにもかかわらず、古代ローマにおいてこのような事態は、十人会とともに現出した⁽¹⁰⁾。その当初彼ら十人会は善良に行動したが、彼らの任期が終了したにもかかわらず、作成された二つの法典を公表しなかつたことによつて、彼らの任期を延長し、公達—十人会は彼らに対して、被告発者の資産を授けたのである—を自らの従者とする手立てを仕入れた。詰まるところ十人会は退陣を余儀なくされ、護民官と執政官が設置されることにより、「ローマに古来の自由な国家が回帰した」⁽¹¹⁾。しかしマキアヴェッリは実に、平民派の二人の護民官—グラックス兄弟こそが、ローマを破滅へ追いやったのだと批判する⁽¹²⁾。周知の如くグラックス兄弟の登場の時点において、歴史の一つの円環が閉じられる。「王政／貴族政／民主政という」各政体の各々が専制を生み出し得る。必要かつポジティブな葛藤と目された、〈元老院 対 平民〉という二律背反こそがマキアヴェッリによれば、ローマの没落の原因となつた。そこから我々は直ちに次のように断言できる。即ち、国家を隆盛へと導く社会政治的—生態的生理学そのものが国家を、その解体へと導くのだと。彼のこのような考察から、ほとんど生物学的とでも称すべき、国家の活力の円環性が浮かび上がってくる。国家はそれ自身としては完全でも、永遠でもないのである。

マキアヴェッリの政治思想を理解する上で、グラックス兄弟に充てられた『デイスコルス』I—37は、たいへん興味深い。

実際既に検分したようにマキアヴェッリは、貴族／平民の社会的葛藤を、国家の健全と進展のため、生理的かつ必然的なものととらえている。また同時にこの二つの階級を彼が、如何なるものと理解していたかを考察することもまた、なおざりにはできない。第1巻第5章において彼は、次のように述べる。即ち、人民の勢力は「貴族のそれと比べて」、自由を保守せしめる働きにおいて、一層適した社会的勢力であり「従って、人民が自由の守護者と立てられた場合、彼等がそれを心して取り扱うことは当然のことであり、また彼等がそれを独占し得ない場合、他者がそれを独占することに寛容ではあり得ない」と⁽¹³⁾。同じ第1巻第5章において彼は、一方では、常住不平に鬱屈し、都市の全ての位階を我がものとしようとする平民どもの護民官が、ローマの自由を台無しにしてしまったと非難しながら、他方では「しかしながら大抵の場合争乱は、もてる者より生ずる。何となれば所有物の喪失への恐怖が彼等をして、所有を渴望するものと同様の欲望に陥らしめるからである」とも論じている。だが第1巻37章において彼は、「彼等がそうした欲望に目覚めたのが必然の所為だったとはいえず、護民官制度の創設により貴族から保護されるようになった、というだけで平民たちは満足しなかった。それをかちとるや否や彼等はすぐに野心を逞しくはじめ、人間誰しも最も重んじるものの榮譽や資産を、貴族とならんで享受しようとたくらみはじめた」ことを認めながら、自らの所説を開陳する。「そしてついには共和国の崩壊へとつながった、農業法をめぐる紛争をもたらした弊害もまた、かかる平民の野心をその起因とするのである」⁽¹⁴⁾。当時のローマにおいて政治闘争―権力闘争とは即ち、実のところ大抵の場合大家門間の抗争に他ならなかった。相互に同盟を結び合いつつ彼等は強大となり、ついで同盟相手を第二階級、換言すれば騎士階級に求め、更には金銭を運用する金融業者たちに求め

るようになった。護民官は、統治能力を持つ政治機関ではなかった。護民官とは異議申し立てのための、統治機関に過ぎなかった。国家の指導階級はまさに護民官を媒介に、平民たちへと働きかけを行ったが、それは国内抗争のための武力を確保するためだった。ローマにおける革命運動の指導者とは、没落した貴族であるかといしは、理想主義に燃えた貴族であるかのどちらかであった。タキトゥスに言わせればその野心によつて、その憎悪によつてローマ人民を解体した者こそ、貴族たちだったのである。ティベリウス・センプローニウス・グラックスは、改革を主張する小党派の支持により護民官に選出されたが、この党派は同時にスキピオ・エミリアヌスを憎悪する一派でもあった。ローマの政治運動は上から、ある有力家門により、あるいは複数の有力家門により方向付けられる、そのような政治運動であった。こうなればローマ共和国の終焉をもたらしたのが、平民の野心ではなく支配階級の意図だったということは、今更言うまでもないことだろう。国家の社会構造の考察に關してマキアヴェッリは、一種のアリストテレス主義者であった。なぜなら社会階層の役割を彼が、固定的なものと考えていたからだ。ローマの宗教自体もまた、それを通じて平民たちが己が分際を弁え、またその頭が高くなった際には、彼等を本来の分際に連れ戻す、そのような働きがあるために、ポジティヴなものと考えられた。彼の政治思想が近代的なそれと趣をことにするのは、まさにこの点においてである。彼は人間を個人としては考えない。彼は人間をある階級の一人としてとらえるのであり、人間一人一人は階級へと永久に縛り付けられているかのようだ。かかる状況下護民官は単なる、異議申立機関として機能するに過ぎない。各個人はそれとしては如何なる価値も有することなく、家門の一員として、団体の一員として、階級の一員として、そして組織の一員としてのみその価値を認められる。更に

言えば彼は、ホッブスがアリストテレスに論争を挑んだ如く、少なくとも形式的に他者との平等を認められない限り、如何なる人間もある国家に参加することはないと、考えてはいない。以下に見るようにマキアヴェッリの考えによれば、ロムルスのようなある一人の人物―即ち君主こそが、国家の定礎者となるのだ。これこそレオ・シュトラウスの呼ぶところの政治学のコロンブス「マキアヴェッリ」が、続く世代に残したもう一つの課題に他ならない。実際『君主論』の著者マキアヴェッリにとって、国家の定礎者となるためには、力と狡猾さがあればそれでよかった。彼は権力の正統性の問題や、社会契約の問題には取り組まない。だがこうした条件の欠如こそが、フイレンツェ国家の脆弱性の根本にあった。獅子にして狐であるところの主権者は、常に陰謀に直面しており、ある種の戦争状態のただ中に生きていた。ホッブスが気づいたように、もし人間がせめて形式的にだけでも、相互に社会契約を交わし、同一の法の下に置かれ、同一の権利と義務を有しうる、平等な存在だと考えられなければ、また彼等に生存競争に参加しうる可能性が与えられなければ、人間が国家の中に組み込まれていくことは難しいことである。ホッブスとマキアヴェッリが、異なる時代に執筆活動を行い、異なる課題を有していたことは申すまでもない。ホッブスが生きたのは、スペイン無敵艦隊の来襲に絶え間なく怯える島国国家。『リヴァイアサン』の哲学者が早々と産み出されたのは、スペイン軍の侵略をめぐるパニック状態を契機とする。長じて彼はおぞましい内戦に際会するが、彼が最愛の友を失ったのもまた、この内戦による。彼はこの友がフランスに亡命するのを見送らなければならなくなることだろう。ホッブスの内戦に対する嫌悪感は、ここから生じた。『リヴァイアサン』においても人間は個人として、競争状態の中におかれるが、彼の考える国家にとり肝要なのは、政治的平和に他ならな

い。対するマキアヴェッリが直面しなければならなかったのは、外寇にあえぐ祖国と党派争いに明け暮れる同郷市民たち。だがマキアヴェッリにとり政治社会的葛藤こそは、国家生活の基盤だ。内戦を恐れるその余りホッブスはまた、古代の歴史家をも憎悪した。そこで『リヴァイアサン』において、彼がギリシャ・ラテンの歴史家による物語を、学校現場から根絶することに共感していることが、余すことなく示される。それというの彼等こそが君主殺害や内戦を教唆した連中だからである。だが注目すべきはマキアヴェッリにとり、両派の内の一派が他派を根絶しようと決意しない限り、社会政治的葛藤が有益なものと考えられていたことに他ならない。グラックス兄弟を論じつつマキアヴェッリは、彼等が平民と元老院の仲裁者になり得ることに盲であったことは、誤りだったと指摘している。彼によれば政治家というものは、自身が参与する有機体を活気づける目的から、葛藤の増悪の術ではなく、政治的熱気を冷却する（時間稼ぎ）の術に精通しなければならぬ。政治家に託された課題が、困難を極めることは確かだ。そして政治家の役割に関するこのような概念から、次のような疑問が噴出してくることだろう。即ち、均衡の針と化すことを通じ、二つの党派の葛藤の仲介者となるのに成功した人物は自動的に、強大な権力の座に登らざるを得ない。そしてまさにそのゆえに彼は、僭主に転落するのを防ぐため、ある種の聖人たり続けなければならぬのではないかという、そのような疑問である。また、このような問題も残される。その問題とは即ち、一旦かかる均衡の針が喪失してしまえば、国家は戦争状態の混沌へと突入してしまうのではないかという懸念に他ならない。そして祖国の健康と自由のため、それら相互の社会的状態において不動の座を占める、二つの勢力の永続的対立の必要性が理論化された場合、このような対立が、時と共に内戦状態へと導かれることは、火を見るより

も明らかであろう点において我々は、マキアヴェッリにおける共和主義の内包する、二律背反を垣間見る。彼は一方において権力の家産化に対して、世襲に対して反対するが、その一方平民たちに対して、社会的上昇の可能性を開こうとはしない。彼によれば、むしろ平民のこのような野心こそが、ローマの破滅を招来した。

『デイスコルス』第四六章でマキアヴェッリは、自由を名目とする、平民と貴族の永遠の断層について語っている。「かくして自由を擁護しようとする欲求そのものが、一方が他者を圧倒できるよう「貴族と平民」双方が勢力を張り合う事態を作り出したのであった」。続く諸段落で彼は、「ある野心から別の野心へと、野心を極めて行く」諸個人につき語っている。このような諸個人は当初、「私人たちからばかりでなく、同様に〈公吏〉からも抑圧されないよう」方途を求めた。「この目的を成就するため彼等は、人脈関係(réseau)を追い求めることになる。彼等はいくつた人脈を、金を貸してやつたり、権力者から人々を擁護してやるような、外見上公正な経路を通じて形成していく。そしてこうした勢力形成が、公明正大なことと見えてしまうため、誰もが騙されてしまうのであり、またその結果これに対して、如何なる対策も立たないということが生じる。かくして、このような人物は如何なる障害に直面することもなく、大半の私人に恐れられ、また〈公吏〉達により一目置かれる存在へと、成り上がってしまう」⁽¹⁵⁾。

状況がここまで来てしまえば、ある人物の権勢は「市民も〈公吏〉も、この人物やその取り巻きを断罪するにあたり、この人物に気兼ねをするようになる程」強大なものとなり、「彼等(市民や〈公吏〉)がこの一人の人物の意に添って、判決を下したり攻撃を行ったりすることもまた、造作もないこととなる」。かくしてマキアヴェッリの叙述から、人間が自由への渴望以上に、権力への渴望によって突き動かされてしまうことがわかる。

だが『デイスコルス』において平民と貴族の間の抗争が、自由をめぐる抗争として理想化された一方で、『フィレンツェ史』においてマキアヴェッリが、自身の都市の葛藤を多様な政治勢力間の、単純な権力闘争として記述したことを、忘れるべきではない。ともあれ『デイスコルス』においてマキアヴェッリは、ある国家における自由の乃至は市民の自由の、正確な定義を提供することがない。彼は自由を常に、自由／隷従の二項対立との関係において定義する。マキアヴェッリによればある一個人が単独で政権を握ったり、その政権任期が長期に亘ったりしたとき、自由は危機にさらされる。『デイスコルス』におけるマキアヴェッリのディレンマは、統治の安定と自由を如何に均衡せしめるかという点に存した。そしてマキアヴェッリが気づかなかったかのように思われるのは、ローマ共和国の制度そのものが各個人に、静穏なる生を保証し得なかつたという事実にも他ならない。タキトゥスによれば、葛藤と内戦に疲労困憊したローマ人民は、彼等を継続的戦乱状態に縛り付ける自由を拒絶し、専制支配に身を屈したのである。タキトゥスもまた自由／隷従という二項対立の幾何学的二律背反と、人間についてのペシミスティックな概念に苦悩していた。君主政の絶対権力は恣意的なものではなく、諸勢力の合意と委任の上に、換言すれば法の上に基礎づけられたものであるということを、タキトゥスはしきりに強調しようとする。周知の如くアウグストゥスは、自由と共和政を復活せしめたと自称していた。マルテッリも言うようにマキアヴェッリも同様に、「表見上共和政体と見せかける国家の上に、メデイチ一門が行使した類の権力を吟味したのであり、メデイチ政権のみならず、ピエロ・ソデリーニの政権とも関連づけられるこのような権力こそ、マキアヴェッリが〈市民的君主政〉と称するところの政体に他ならない」⁽¹⁶⁾。このような考察は別として、国家の基盤に関する彼の

基礎概念そのもののせいで、自由／安定をめぐるマキアヴェッリのディレンマは、中々解決し難いものがあつた。『デイスコルス』第一巻第九章においてマキアヴェッリは、一国家の基礎作りには、一人の人間が存在すれば充分であるということを強調した。マキアヴェッリは、レムス殺しの下手人ロムルスを模範として持ち出しながら、このロムルスがその権限を世襲化せず、元老院を創設したその故に彼が免責されたことを主張する。ここに示されるのは武力抗争の後、一党派の物理的根絶の上に確立された国家の姿である。換言すれば、〈兄弟殺し〉あるいは内部闘争という一点に始源をもつ国家、対立する二つの社会階層の永続的葛藤に基礎づけられた国家、そしてかかる葛藤の昂進により崩壊する国家の姿である。これこそ、『デイスコルス』の記述から導き出される構図だ。マトウツチによれば、マキアヴェッリにとり重要なのは国家の持続ではなく、持続の質である⁽¹⁾。この点から見れば彼にとり、ローマの関した三〇四〇年間の歴史は、ヴェネツィアの七〇八〇〇年間のそれより、一層重要だということになる。が、マキアヴェッリに妥当であつたこうした議論が、我々にも同じように妥当であるとは言い難い。我々は既に、彼以後の何世紀もの歴史を背負っており、スペイン帝国や大英帝国の如き、近代的世界支配権の没落を見続けてきた。これらの世界支配権の崩壊がそれとして、それを産み出した国家主権そのものの終焉を意味する訳ではない。その属領における領域主権の崩壊を見たローマと対照的に、スペインもイギリスも、今日尚依然として主権国家たり続けている。『デイスコルス』が提起する問題とは即ち、ロムルスが支配することになる人間達が、ローマ国家の定礎から排除されてしまっていることに他ならない。ロムルスの正統性はただ単に、レムスの殺害に依拠している。ホッブスにおける人間達はマキアヴェッリのそれと酷似しているが、後者と異なるのは、

彼等に生活の安全を保証しない闘争状態を回避するため、ある種の契約を締結し、ある一人の人物乃至は人々の集会に、彼等の葛藤の裁定者となる権限を付与した点に求められる。一方ルソーにおける人間達は、自身が国事行為の当事者乃至は主演者となるために、そこにおいて市民各自が他者に対し責任を負うような、そのような契約を役立てる。ホッブスもルソーも、異なつた時代に異なつた様式で、政治学のコロンブス―マキアヴェッリの二律背反に取り組んだ。だが一方マキアヴェッリが、その自体フィレンツェにおいては、内部の政敵を打倒するため外国勢力に依存するという事態に帰着してしまふ、彼により選択されたモデルの限界を、自覚していたことは確かである。そこから彼は、フランス並びにスペインに目を向ける。彼は『デイスコルス』第一巻第五章において、「フランスやスペインにおいて、もし無秩序が我がイタリア程でないとすればそれは、これらの国家の諸制度が未だ故障していないからに他ならない」と、断言する。このような理由から、『デイスコルス』第一巻第十八章においてマキアヴェッリは、フィレンツェを念頭に置きつつ、ある都市の頹廢が膏骨に入つた際には、ある君主がそれを再編しなければならぬとする。これこそ『君主論』に語られるところの、イタリアの〈救済者〉としての君主であるが、『デイスコルス』において告知される如く、ある共和国を手中に収めるためには、悪人である必要が存する故に、このような君主が善人であり得ようはずがない。「ある都市国家を〈政治生活〉に回帰させるためには、善人が必要である。だが暴力的手段により、この共和国の君主となるためには、悪党であることが必要とされる。而してある人物が、良き目的を保持したまま、悪しき手段により君主の座に登ろうとすることも、逆に君主の座に登つた悪党が、良き振る舞いをなすことも、極めて稀なことだということがわかる。このような人物が、

悪しき手段で入手した権限を、良き目的のために用いることに、
 思いを致すことなど滅多にないことなのだ」⁽¹⁸⁾。マキアヴェッ
 リが喝破したように、「第一のデイレンマとは即ち、人間それ自身
 に他ならない。

注

- (1) Cfr. T. Hobbes, *Three Discourses*, A critical Modern Edition of Newly Identified Work of the Young Thomas Hobbes, a cura di N.B. Reynolds e A.W. Saxtonhouse, Chicago-London 1997.
- (2) Cf. N. Machiavelli, *Discorsi sopra La Prima Deca di Tito Livio*, Milano 1984, I-2, pp. 64-67.
- (3) R. Syme, *The Roman Revolution*, London 1939 (La rivoluzione romano, trad. it., Torino 1962).
- (4) Cfr. *ibid.*, p. 319.
- (5) Machiavelli, *Discorsi sopra la Prima Deca di Tito Livio* cit., I-6, pp. 77-78.
- (6) *Ibidem.*
- (7) *Ibidem*, pp. 142-145.
- (8) *Ibidem*, I-37, pp. 139-140.
- (9) *Ibidem*, I-7, pp. 81-82.
- (10) *Ibidem*, I-35, pp. 137-138.
- (11) *Ibidem*, I-40, pp. 147-152.
- (12) *Ibidem*, I-17, pp. 139-142.
- (13) *Ibidem*, I-5, pp. 72-75.
- (14) *Ibidem*, I-37, pp. 139-142.
- (15) *Ibidem*, I-46, pp. 157-158.
- (16) M. Martelli, *Letteratura fiorentina del Quattrocento. Il filtro degli anni* Sessanta, Firenze 1996, p. 59.
- (17) Cfr. N. Matteucci, Machiavelli politologo, in M.P. Gilom (a cura di), *Studies on Machiavelli*, Firenze 1972, pp. 209-248, 215.

(18) Machiavelli, *Discorsi sopra la Prima Deca di Tito Livio* cit., I-17, pp. 108-111.